

『藤篋冊子』 「花園」の構想

— 江村北海『虫の諫』との比較を通して —

正 本 綏 子

はじめに

『藤篋冊子』の完本は、一八〇六（文化三三）年秋に巻一から巻三までが、翌一八〇七（文化四）年春に巻四から巻六までが刊行された六冊本である。秋成の古稀を記念しての刊行であった。構成は、巻一・巻二が歌集、巻三から巻六までが文集となつてゐる。そこに付された昇道の附言には、秋成自身はその刊行に賛成してはいなかつたことが記されている。しかし中村幸彦氏が、実際には秋成は「自ら筆を採つて、旧稿を改めるに務めたり、新しいものを書き加えたりしてゐる。」と指摘されるごとく、彼自身も『藤篋冊子』の刊行には積極的に働きかけていたと考えられている。²⁾したがつてこの集は、秋成にとつて文業の集大成であつたと見てよからう。そのよくな意味において、『藤篋冊子』はそれ自体の価値も今まで以上に検討される必要があり、また秋成の晩年の創作意識を知る上でも多く

の示唆を与えてくれるであろう作品として注目される。

本稿では、巻四に収められた「花園」に焦点をあてる。これは秋成の友人上田耕夫の牡丹園を賞美する文章である。前半では蜂と蝶との論争を通して人生観が語られ、後半では蝶についての様々な考証が綴られている。中村博保氏は「花園」の、例えば最初の虫達の論争から秋成の友人村瀬栲亭の「愛花人詞」の引用へと続く部分の脈絡について、次のように述べておられる。³⁾

これらの文章、それぞれ互いの間に関連はない。しかし、だからこそイメージがイメージにつながり、その転換のすき間から予期せぬ興味がひろがるといった開かれたおもしろさをもっている。

ここに表れているように、中村氏は「花園」のそれぞれの文章間の脈絡を否定し、その脈絡のなき自体に意義があると論じられる。かつて風間誠史氏が『藤篋冊子』を「雑居するテキスト」と呼び、

この集全体の意義をそれぞれの文章の相互関連のなき自体に見出た
そうとする説を唱えられた。⁶² 中村氏の説も、ご自身が引かれるよう
に、風間氏の説に通じるものである。このような考えに基づくと中村
氏は、「花園」は「蝶に関するトピックのコレクション」あるいは
「蝶の小詞華集」であり、「雑居するテキストなのだから、この文
章（作品／中村氏注）に中心はない。」と敢えて断じられるのであ
るが、私にはそうは思われない。確かに一見したところ、「花園」
は雑多な文章の羅列に見える。またそれぞれの文章の性格の相違が
「おもしろさ」の一つでもある。しかし、結論を先立って言えば、
それらは、決して無秩序に、また無統一に並べられているわけでは
ない。そこには綿密な構成意識と、一貫した主張のもとに文章が綴
られた形跡を見て取ることができる。以上の点から本稿では、「花
園」が統一した主題を有した文章であることを明らかにしたいと思
う。

一

前述したように、「花園」は大きく二つの内容に分けられる。前
半は語り手の空想である。内容は蜂と蝶との議論で、まず花々に戯
れる蝶を蜂が非難する。蜂の言い分は、蝶が昔は毛虫で醜かったに
もかわらず、今の姿の優美であることに奢り高ぶっていて憎らし
いというものである。これに対して蝶は、これが自分の天性なのだ

からそれに従っているだけなのだと反論して行ってしまう。この物
語的な空想の後、和歌が一首置かれ、続いて後半で蝶にまつわる詩
や考証を集めたものが綴られる。

鳥獸や虫などに仮託して思想を述べる形式は、老荘思想の流行に
端を発する『田舎莊子』などに代表される談義本の隆盛に伴って広
く行なわれた。中でも「花園」を読む際に見過ごせないのは、江村
北海の『虫の諫』（一七六二（宝暦二）年刊）である。周知のご
とく、北海は一八世紀後半の京都の詩壇を代表する漢詩人である。
『虫の諫』は北海には珍しい和文の作品で、内容は、語り手である
「吾」が、様々な虫が一堂に会する中で、それぞれの虫に対する批
判を述べるといふものである。その刊行に至る経緯は不明ながら、
高橋昌彦氏の詳細な調査に基づく論考⁶³が備わる。『虫の諫』は、自
序冒頭に「以人諫虫乎。以虫諫人也。」⁶⁴とあるごとく、形式的には
人間による虫批判であるが、その実、虫に仮託した人間批判の書と
見てよいようである。北海は宮津藩の京都留守居役を勤めていたこ
とがある。文人として活躍するのは、その職を辞して後のことであ
る。高橋氏は「この本を世に出すことは、藩に致仕を認めさせる意
味があったのではないだろうか。」と推察される。つまり在職中に
不正の横行する現状を目のあたりにし、その憤りを吐き出した書で
あろうというのである。実際『虫の諫』の語り口はきわめて厳しく、
高橋氏が「『虫諫』を読んだ周辺の人々は、北海の立場も意図する

ところもわかつたはずである」と述べられるところが事実であるとするれば、その影響は大であつたに違いない。

さてその『虫の諫』において真先に矛先の向けられるのが蝶であり、それに続くのが蜂である。その部分に「花園」と酷似する点がいくつか見出だせる。「花園」がこの『虫の諫』を下敷きとして書かれた可能性はないかどうか、まずこの点の検討から始めたい。

『虫の諫』と「花園」とで類似する表現を、四点にまとめて次に示した。

(a) 虫・人・植物が憧れて蝶になつたということ

『虫の諫』

春の日影長閑に。東吹風やはらかに花紅に草緑なる頃しも。簷をめぐり籬を過る。胡蝶の戲計楽しげなるはなし。〔中略〕其全盛のありさま。誰か汝に及ぶべき。されば汝が類ひの末が末までも。汝か身上をうらやみしたはざるはなし。〔諸虫多く蝶に化する故に云。〕たゞ汝が類ひのみにもあらず。人といへども又しかり。唐の莊生は夢中に汝が形となり。我邦の佐国は死後に汝か姿と化す。たゞ人のみにもあらず。陳麦の無情なるも。又よく化して汝となる。〔小麦の蝶に化するをいふなり〕

「花園」

新撰「字鏡」といふ文に、蝶をかはひらごとよみたるを、和

名抄には、蛾をひくと見えしが、あづまにては手ひら子と呼とも聞し、蛾は蝶の小さきを云となれば、ひとつ物にてぞある、堤の中納言の物がたりの、虫めづる姫君の巻に、かは虫のおそろしきを手にあさせ給ひて、蝶とて人のめづるも、是がなるなり、よろづのもの、其をほりをまで見はてゝこそと見えたりき、さは鳥毛といふかはむしのなれるもて、かはひらごとはよぶか、しかすがにこれのみにはあらで、園、蔬の葉、三つがふたつは蝶となる、故に字は葉にしたがふと云り、又鳥足といふものゝ、根は蜻蛉となり、葉は蝶となれりとや、又百合の花かならずなれりと云、猶さまくにくげなる虫のなりかふるを、昔の井中住に見たりき、又虫や木草の葉のみならず、人もなる也、莊周大江の翁もこれにたりたるなりけり、

(b) 蝶は昔の卑しい身の上を忘れて今は奢り高ぶっているということ

『虫の諫』

されば汝が心を察するに。揚々として定まらず。汝が形をみるに。翻々として静かならず。凡世中にわれほどよき身の上はなしと思へるさまぞかし。されども吾を以て汝をみれば。いといやしみ悪むべきものとこそ覚ゆれ。汝が今のゆたかに樂しげなるは。生れしまゝの幸ならず。汝かなりたちは。も

といやしき菜むし毛むしにて。そのかみ貧しかりし時は。一重の衣の。身を覆ふだになく。其形のむくつけきを。世の人にいみ嫌はれ。汝もさすがはづかしと思ふにや。木々の枯枝を取集め。身の程隠す巢を作りて。木陰ふかく下りかくるゝも有。《中略》又わけて憎むべきは。賤の男賤の女の。夏日のあつきをもいはで。種まき土かい。心をくるしめ。やしな立る土大根蕪菜の葉ごとに。汝が友を語らひ。残りなく喰破る。《中略》されば汝がなりたちの。いやしく悪むべきは。かゝることなりしぞかし。いかにいはむや。一旦はからざる福を得。今のありさまと成ぬれば。たちまち本の身を忘れ。むかしおのがどちと語りむつびし。根切。すくもむしの類ひは。世にあるものとも思はず。たま／＼往來の路に逢ても。しらぬ顔にもてなし。只富貴のまじはりをのみ願ひぬる。

「花園」

汝はかは虫のおそろしきよりなりたるをわすれ兒に、今の私たちのなよびかなるにはこりて、人の目おこせたらんことをつとむるよ、あなつらにくと云、

(c) 玄宗皇帝の故事

『虫の諫』

唐の玄宗の時にあたりて。六宮の粉黛百にあまり千に超。何れをそれとわくべくもあらねば。あまたの宮女を。一つ所

にあつめ。其中に汝をはなし。汝か翅をやすむる。花のかざしをしるべに。夜のおとよへ召れぬとかや。

「花園」

開元遺事、明皇宮中春宴、令妃嬪挿艶花、帝親捉粉蝶放之、隋蝶所止幸之、楊妃專寵不復此戲、

(d) 蜂を批判する際の表現

『虫の諫』

蜂のことも才ありて徳なき生れとやいはむ。口にあまき蜜ありて。腹にするどき劍をかくすこそうたてけれ。

「花園」

何がしとか聞えしねぢけ人を、口に蜜して、心にはり有とたとへしは、誰が上ぞや、

(a)では、表現や順序は異なるものの、植物、虫、人が蝶に変わったという内容を記している点で共通する。特に莊周、大江佐国が引き合いに出されているところはまったく一致している。(b)の蝶が昔の卑しい身の上を忘れて、今は奢り高ぶっているということを述べる箇所では、「花園」の方が随分と簡素であるが、蝶が昔を忘れてること、その上で今の姿に慢心していることの二つの要点は共通して押さえられているようである。(c)の玄宗皇帝の故事は、「花園」では出典が明らかにされている。内容はまさに『虫の諫』に引かれ

たものと一致する。最後が蜂に対する批判に移った場面に見られる(d)の表現である。両者よく似た表現ではあるが、へ口に蜜の、後、『虫の諫』では「腹にするとき劍」となっているのに対して、「花園」では「心にはり」となっており、若干異なっている。中村博保氏は、「唐の宰相李林甫のこと。新唐書・李林甫伝に「世謂林甫口有蜜、腹有劍」。蜜も剣も蜂からの連想。」とされている。『虫の諫』の方がこれをふまえたものであるのは明らかであるし、秋成もおそらくこの典拠に思い及んでいたのであろう。しかし「心にはり」という表現の「花園」の場合はむしろ、木下長嘯子作とされる『虫歌合』の次の表現からの影響をも指摘するべきかもしれない。

ひだり

こうろぎ

中くにあれてもよしやくさのいはいつこうろぎときみはたの

めず

一番

みぎ

はち

こゝろにははりもちなからあふときはくちにみつあるきみそわ
びしき

はんしやとして、やぶの本のひきがある、申ていはく、左の歌、いつこうろぎと君はたのめず、など、わがなをいひなして、人をうらみしこそ、さくいありてきこへ侍れ、右のうた、くちにみつあるきみといへる すこしいやしきや

うにきくなし侍れは、ひだりのうたをかちとや申はんべら
ん (傍線筆者)

とはいえ、『虫の諫』からの影響が皆無であったとは言えないので、ここは『虫の諫』と『虫歌合』との両者が参照されたものと考えておきたい。

以上のように「花園」には、『虫の諫』から示唆を受けたとおぼしき表現が多く見出だされる。蝶批判、蜂批判という内容からしても、「花園」が『虫の諫』を下敷きとして書かれたものであると認めてよいであらう。

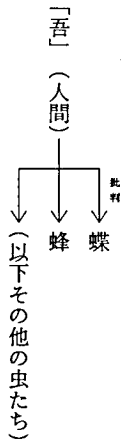
ところで「花園」には、『藤篋冊子』に収められる以前の草稿が存在することが確認されている。最も早いと見られているのは、大阪府立中之島図書館蔵『余斎文集』に無題で収録されている文章である。多少の表現の相違が認められるのみで、文意は「花園」と変わらない。この文章の末尾に、「余斎拭目眼書之／時歳六十六」と記されていることから、一七九九(寛政一一)年には「花園」の原形は成立していたことが解る。ただしこちらは「花園」で言えば蜂と蝶との論争の後に置かれた和歌までで終わっており、以降の稿で袴亭の詩以下の部分を書き加えられたと考えられる。この文章の原形が蜂と蝶とによるそれぞれの批判が語られたものとまとめられていたのならば、同じく蝶と蜂とを批判する『虫の諫』からの影響の可能性はますます高くなるであらう。

「花園」の成立に『虫の諫』が深く関与していたとしても、秋成が『虫の諫』と全く同趣旨の文章を書こうとしていたとは考えにくい。何らかの獨創性を狙っていたと見る方が自然であろう。ここまですべて「花園」と『虫の諫』との関わりを論じてきたのは、以下『虫の諫』との比較によって「花園」を見ていくためである。『虫の諫』と比較することは、「花園」の構成意識や主張の特質をより明瞭に浮き彫りにすることにつながると思えられる。

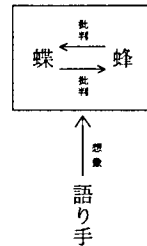
先にも若干触れたが、ここで改めて全体構造の相違を確認しておこう。『虫の諫』は人間である「吾」が虫達を評するという形をとっているため、その批判は「吾」から虫達に一方的に下されることになる。これに対して「花園」では、まず蜂が蝶を批判し、蝶がその蜂に向かって反論するという対話形式がとられている。語り手はそれらを想像しているという立場にある。それぞれを図示すれば次のごとくになる。

図 全体構造の相違

『虫の諫』



「花園」



『虫の諫』において「吾」は、言わば絶対的な位置にいる。虫達に反論の術はない。あるいは作者北海の憤慨の激しさのあらわれかもしれない。一方「花園」では、蜂と蝶とを対等な立場に置いて討論させている。蝶に反論の余地が与えられているわけである。この基本構造の相違は、結果的に『虫の諫』と「花園」との主張を大きく隔てることにもつながっている。

それでは具体的に論の内容を検討していく。『虫の諫』の論旨を追ってみよう。

①胡蝶の戯れる姿は優雅で楽しそうだ。虫も人も植物も、皆蝶に憧れて蝶になる。しかし蝶の心には奢りがある。(先の「花園」の類似点(a)及び(b)「されば汝が心を察するに。」)「凡世中にわれほどよき身の上はなしと思へるさまぞかし。」(参照)

②「吾」から見れば、蝶は蔑むべき存在である。もとは姿の醜い虫であったうえに、野菜を喰い民を苦しめる罪深いものだからである。(同(b)「されども吾を以て汝をみれば。」)「されば

汝がなりたちの。いやしく悪むべきは。かゝることなりしぞかし。」(参照)

③それなのに蝶は、美しい成虫になってからは、そのことを忘れてたように振る舞う。昔のつきあいを忘れ、富貴なものとのみ交わろうとする。(同(b)「一旦はからざる福を得。」「只富貴のまじはりをのみ願ひぬる。」(参照))

④人もその姿の美しさを受でる。蝶も心根でなく姿の美しいほうにばかり寄り添おうとする。そして今の栄華がいつまでも続くものと思つてゐる。

世上の人といへど。汝か翅の白粉に。つくろいかされる色にめて。又は便辟の身のふるまいにまどはされ。昔のあしかりしは思はで。詩に作り歌によみ。往昔むくつけくうるざしと思ひし。宮女閨人も。かざしの花に汝をしたひ。羅の團扇に汝をまつ。(同(c)以下中略)園の木立の中にも。松の栢のみさはありて。心かたきは。へんくつものといみきらひ。かりそめにも立寄らず。只桜海棠牡丹山吹のことき。花の富貴なるが許へしたしみにへつらふ。(中略)汝か心には定て思ふべし。われこそ又なきよきよるべ求め得たれ。傍へには何ともいへ。われはひたすら牡丹の花王を君と仰ぎ。こかね花さく山吹の心に従ひ親しまば。我身の栄花も共につきすまじと。

⑤しかし栄華は長く続くものではない。高慢な振る舞いの報いを受けて、惨めな末路をたどることになるのだ。

汝しらずや。奢るもの久しからず。又しらずや。黄金結り交り黄金尽て交うとし。春の花の富貴いく程ぞや。夏の青葉とみるが内に。秋風吹立。露霜に色づくほどもなく。とみに落葉と朽はてよ。おのが根を覆ふ計の蔭もなくなりぬれば。諺に云。頼む木の下に雨もるとは汝が身の上なるべし。かの春の頭。花もなく。淋しく見へし松栢は。此時にあたりて。縁物ふかく。木陰も頼もしげに見ゆれ共。汝常くおろそかにもてなし置つれば。今更俄に立寄ること叶はず。かなたこなたさまよふにぞ。始て己が身の程を思ひしり。二たび根切すくもむしの。古き友を尋ね。もとの穴へ入らんとすれば。なまなかの翅出来て。己か身も心に任さず。野辺の草葉は枯はてよ。口をうるはず露もなければ。広き天地に。わづかなる身の置どころなく。終にあらぬ方にたふれ死ぬ。

蝶の、昔の罪から現在のうわつた振る舞いまでをあげつらい、その報いとしての惨憺たる最期にまで言及している。これを自序の通り虫を以て人を諷めるものとして読むならば、ここで糾弾されているのは、民を苦しめることで私腹を肥やし、成り上がってからは権勢に媚び諂うことばかりを考えている輩であろう。ここでは蝶の

「輕薄」さが徹底的に排撃されている。

なお、続く蜂への批判では、蜂は才はあるが徳がないという点があげつらわれる。『虫の諫』の構造上、蝶への批判の内容と蜂へのそれとは特に関係はない。

それでは一方の「花園」を見てみよう。こちらではまず蜂が蝶に對して言う。

いにしへの世には、南山の蘇東門の栗、おつる梅、その実いくらなど云て、浅はかに花の色香をのみなつかしめる例はなかりき、世うつり、人の心あだくしければ、眼を青くし、鼻をさしがるこそ、うたてめしき心ざまなれ、おのがともはしからず、昔の陶隱居がまめ心をまなび、慈きを吸もくらひもしつゝ、腹みたんことをつとむる也、汝はかほ虫のおそろしきよりなりたるをわすれ兒に、今のかたちのなよびかなるにはこりて、人の目おこせたらんことをつとむるよ、あなつらにくと云、

『虫の諫』の微に入り細を穿つかのような批判に比べると、こちらは表面的なものにばかり気をとられるあり方への批判という一点に絞られている。その際陶淵明を引き合いに出して、うわべに捉われない「まめ心」こそが重要なのだとする主張を明確に打ち出している。これに對して蝶が次のように反駁する。

いとも聞にくしかし、人とても、このめる道に名を揚、そしりをもくとむとや、ましてあなづらしきおのがたぐひの、さるわ

きまへやはある、たゞ心のすゝめるかたにたはふれて、命生んにはしなじ、何がしとか聞えしねぢけ人を、口に蜜して、心にはり有とたとへしは、誰が上ぞや、さあれ、誰々も親のうみて給ひしまゝなるをいかにせん、物とがめしていたくなさいなみそとて、かなたの枝にうつりぬ、

蝶の主張は、他者からいかに非難を受けようとも天性に従つた生き方に優るものはないというものである。蜂はむしろ、論が先行して心根と齟齬をきたした不自然な状態と捉えられている。

「まめ心」を称揚する蜂と、「親のうみて給ひしまゝ」を志向する蝶と、このいずれもが道理になつていとも思われる論争に、「花園」では結論が下されている。蝶の反論の後、次のような一文が見える。

木末の小鳥どもの、このことわりをうべくしとにや、花に実
に、おのがこのめるかたに、あかれくにいきぬ、

虫達の論争に耳を傾けていた小鳥たちは、「花」にしろ「実」にしろ、ともかくも「おのがこのめるかた」(傍点筆者)に飛び去つたとある。鳥達は「たゞ心のすゝめるかたにたはふれて」生きよとする蝶の言い分を「うべくし」として、さっそく実践したのである。「花園」において最終的に軍配が上げられたのは、蝶の側であった。『虫の諫』では実社会でのやるかたない憤懣を反映してか、蝶の「輕薄」さが蔽しい語り口で綴られている。「花園」の蜂によ

る、形式に左右されない「まめ心」の奨励もこの延長線上にある。しかしながらそのように「まめ心」に拘泥することは「親のうみて給ひしまゝ」であることに反する行いであり、結局自然体であることに優るものはないと結論付けられているのである。

以上のように、『虫の諫』では「吾」によって一方通行の蝶・蜂批判が語られていたのに対して、「花園」は論争の挙句に蝶の主張を是とする、蝶肯定の文章となっている。これが『虫の諫』との大きな相違点であり、「花園」の成立意義の存するところであると言えよう。

三

ここまで、『虫の諫』では完膚なきまでに排撃された蝶に対して、むしろ蝶を支持する点が「花園」の面目躍如たる部分であることを述べてきた。とするならば、なぜ蝶に心を寄せなければならなかったのかという疑問が生じる。その理由は言うまでもなく「花園」の成立の事情と深く関わっている。『花園』には題の下に「題^三上田耕夫東山第」という添え書きが存する。このことが文章の内容を根本的なところで制約している。

「花園」に引かれた栲亭の詩は、『発心集』に見られる、大江佐国が花を愛するあまりに蝶になるといふ説話をもとにしたものである。¹⁶これを引用した後、語り手は次のように言う。

このことまこといつはりをしるべからねど、誰采出てむかしを
しのぶ人もなかりしに、君常に花めづるさがおはせるには、
相憐みて、この詞はつがるゝなるべし、さはおもひをやるほど、
我や蝶やのふることの、香を嗅ぎ、露をなめつゝ、花にこゝろ
をあそふらん、我もこれにいさなはれては

夢に入らうつゝにはまた身をかへて、春はこてふと花につげゝ
ん、

それとだに親のつかへをたのめては、花の日数のをしまるゝ
かな、

語り手はまず、栲亭は「花めづるさが」を有する者として佐国に共感してこの詩をものしたのであらうと言う。そのように思いを馳せる語り手は「我もこれにいさなはれて」和歌を二首詠む。つまり「花めづるさが」を持つ者として蝶―佐国―栲亭―「我」は、一筋の糸で結び合わされている。また「花園」の末尾を見てみよう。

其佐国といふ人は、御堂の閑白どのゝおふせことたりびて、
万葉集をよみて奉りしとも聞侍るには、此集よみふける我も、
あやし、死ては人の園にや遊ぶべきと、いとほかなき思ひこそ
せらるれ、

さまざまに色ある衣の袖はへて、恋すてふとや花にたはるゝ、
「花めづるさが」が高じて蝶になった佐国は『万葉集』を訓んでいた。語り手は同じように「此集よみふける我も、あやし」と憧れ

にも似た危機感を吐露する。ここにも佐国と「我」との共鳴が見られる。

蝶に共感するのは人間ばかりではない。「花園」には蝶に関する様々な考証が並ぶ。再びその部分を見てみよう。これは先に掲げた『虫の諫』との共通点を整理した箇所(a)にあたる。まず蛾と毛虫とが、蝶と同じものであること、続いて園蔬の葉、烏足、百合などの植物や、虫が蝶に変わったという記事、そして最後に蝶に変わった人間の伝説が綴られる。一見蝶にまつわる雑多な記事の集積にも見えるが、実はそうではない。ここはすべて蝶に変化した動植物の記事で統一されているのである。この(a)から(c)をもとに、再びそれぞれの論の構成順序を見てみよう。『虫の諫』は次のような順序で論が進んでいく。

(a)虫・人・植物が憧れて蝶になったということ

(b)蝶は昔の卑しい身の上を忘れて今は奢り高ぶっているということ

(c)玄宗皇帝の故事

「花園」ではこの順序は、次のように入れ替わる。

(b)蝶は昔の卑しい身の上を忘れて今は奢り高ぶっているということ

(c)玄宗皇帝の故事

(a)虫・人・植物が憧れて蝶になったということ

このような操作を行なうことで、その文章の言わんとするところは大きく変化する。『虫の諫』では、まず(a)蝶が多くの動植物の憧憬を集めていることを言った上で、(b)実はむしろ卑しむべき存在であることを声高に主張していく。(c)玄宗皇帝の故事も、いかに蝶が「軽薄」か、またそれをもてはやす人間が「軽薄」かを主張するために置かれている。一方「花園」では、最初に蜂に(b)蝶のうつつい様子を批判させておいて、最後には(a)それでもやはり蝶には皆が憧れるのだと結ぶ。間に置かれた(c)の故事は、むしろ玄宗皇帝が蝶を愛した例として機能している。古今東西あらゆる動植物は皆蝶に憧れるもので、それは「花めづるさが」そのままに自由に花に戯れるからにはかならないのだという、「花園」にはそのような論理が働いているのである。

このように「花園」という文章は、「花めづるさが」で統合された一編であると言える。すなわち「花園」の意図は、「花めづるさが」を持つ最たる者である蝶へのあらゆる動植物の共感や憧憬を語ることで、間接的に花を礼賛するところにあった。それはまさしく、同じく「花めづるさが」の持ち主であるはずの友人の牡丹園を賞美する文章としてふさわしいものであると言える。「花園」は決して無作為に選ばれた記事の羅列ではない。むしろ目的に応じて綿密に構築された、きわめて洗練度の高い一編として評価されるべきである。

おわりに

以上、「花園」の下敷きとなったと思われる江村北海の『虫の諫』との比較を通して、この一編の眼目を探り、その意味を考察した。『虫の諫』とは異なる「花園」の最たる特色は、『虫の諫』では完膚なきまでに排撃された蝶に、最終的には憧れを寄せてゆくところにあった。古人も友人村瀬栲亭もそしてもちろん語り手も、また人間だけではないあらゆる動植物が皆蝶に憧れ、同化しようとする。それは「花めづるさが」を持つがゆえの共感であった。とするならば「花園」は友人上田耕夫の牡丹園を賞美するという目的に沿うべく、明確な構成意識のもとで綴られた文章であると言うことができ。だからこそ文章には「花園」というタイトルが冠される。ここに謳われた〈花園〉は、「花めづるさが」を持つ者が心を寄せる対象として称賛されているのである。

ただしいったん「花園」の内部から足を踏み出し、秋成の他の著述の中にこの一編を置いて見た時、そこには看過できない問題が存在することも事実である。最後にその点に触れておく。

「花園」に描かれた蜂と蝶との論争では、蝶に軍配が上げられることは先に確認した。この蝶の主張が秋成の持説であったことは、中村博保氏の指摘するところである。¹⁷ 次の『金砂』四（一八〇四〈文化元〉年奥書）の一節などにも、それはうかがうことができる。

さかしおろかは。人おのく親のたま物をいかにせん。我いつはらずは。世の人頼むへし。しかして後にこそ。よき名は久しかるへけれ。

蝶の自然体を志向する説は、秋成の晩年にその例を見出だすことができ、彼の思想の帰着点を特色付けるもの一つである。この説を支持する「花園」という作品が、彼の文芸の集大成である『藤篋冊子』に収められたことには、ごく自然ななりゆきを想定することができる。

しかしながら問題はそれだけでは片付かない。再び先に挙げた蜂による蝶批判の部分を見てみよう。既に確認したように、蜂はうわべにとらわれることを嘆き「まめ心を」称揚する。『詩経』をふまえたこの表現とよく似たものは、『ぬばたまの巻』（一七七九へ安永八）年序）に見える。

或は花の色香を後にして。おつる実をかぞへ。南山の蕨。東門の栗の子など。百の田なつ物についていへる。其詞はみやびかなるも。ひなびたるも。其うたふころのよきにかなへるをえらび出たるが中には。たま／＼姪れたるころばへが有とて。忌にくむ人もありげに聞ゆれど。それぞ人のうまれ得しねがひのひとつなれば。しひてうとむべき事にもあらじ。さて国栄え。人の心花にのみうつりゆきては。事はたくみに。詞はあやに。かれにまつはされ。是にねぢけつ。あふさきるさに事

立て。書は憤りより書もするものにいふよ。(傍線筆者)

表現のみならず内容についても、「しひてうとむべき事にもあらず」とあつて積極的に肯定されているわけではないにしろ、詞よりも内実を大切にする態度を評価しようとしており、「花園」の蜂の主張に通じるものがある。また、人々の関心が「花」に移った後の世が否定的に捉えられてもいる。これは「花園」から三十年近く遡った時点のものであるが、晩年の記述の例としても、『金砂』の冒頭をあげることができる。

万葉集の哥は。此道のおやなるから。哥よむ人の。先読みつへきふみ也。されと初めて披き見は。唐囀りの如おほして。再び手に取ましく。かつ説とも。今いかてかくとおほさんには。なほさりにかいやりてん。そのかみは。人の心すなほにて。云出る言もあからさまに。心まめくしく。姿しらへもゆたけて。男はますら雄たち。をみなもをとめさひして。後の世の。こまやかに。さかしき手ふりにはたかへりき。

このような、形式よりも内容を重視しようとする文芸論を秋成は、生涯にわたり一貫して唱え続けたようである。こうした文芸論と「花園」などに見られる人生観とがどのように関わるかについてはなお検討を要するが、おそらく両者は深く影響し合いながら形成されていったものであろう。「花園」の抱える問題とは、この主張が蜂に託され、最終的には蝶によって退けられるということにある。

蜂に託された論も、蝶に託された論も共に秋成の持説であつた。同じ『金砂』に記述が見出だせることから解るように、両者は晩年の秋成の中で矛盾しないものとしてあつたはずである。にもかかわらず「花園」においては蜂の論は退けられ、蝶の優位を保持したまま文章は閉じられる。友人の庭園を賞美しようとする文章の目的も無関係ではないだろう。この点は興味深いところながら、「花園」のみでは解決のつかない問題であり、ここでは指摘にとどめておく。なお検討の余地は多く残すが、今は述べるだけの準備がない。しかしながら今回の考察が、「雑居」以外の『藤篋冊子』の評価軸を探り当てる手がかりになればと考えている。

注

- (1) 『上田秋成全集』第十卷(中央公論社) 解題。五二六―五二七頁。
 - (2) 長島弘明氏は『藤篋冊子』の和文(『文学』一九九五年七月)において、当時の書簡の検討を通して、同様の結論に辿り着いておられる。
 - (3) 『和文の世界』(『国文学』第四〇巻第七号(一九九五年六月))。なお新日本古典文学大系『近世歌文集 下』(岩波書店(一九九七年八月)) (以下、新大系)にも、解説としてこの論文に加筆したものが付されている。
 - (4) 「文学として……」の上田秋成——雑居するテキスト／『藤篋冊子』論——(『日本文学』第四四巻第四号(一九九五年四月))。
- (5) 注3に同じ。

(6) 「江村北海の前半生」(都留文科大学国語国文学会『国文学論考』第二六号へ一九九〇年三月)。

(7) 以下「虫の諫」の引用は、大阪府立中之島図書館蔵本(大木。三卷三冊。刊記「宝曆十二年壬午季秋/平安書肆」西川氏蔵本、唐本屋吉左衛門発行)による。なお、割注は()で示し、一部漢字やおどり字の表記を通行のものに改めた。

(8) 注6に同じ。

(9) 注6に同じ。

(10) 以下「花園」をはじめとする秋成の著述の引用は、『上田秋成全集』(中央公論社)による。なお、ルビは概ね省略し、一部漢字やおどり字の表記を通行のものに改めた。

(11) 『上田秋成全集』では「鳥足」と翻字されているが、ここは、新大系に指摘があるように(四三四頁・注二六)、『列子』「天瑞」の「鳥足根為二蟾一、其葉為二胡蝶一」などによる表現であると思われる。この点から「鳥足」と改めた。新大系は「鳥足」としている。

(12) 新大系。四三一頁・注三一。

(13) 引用は、『長嘯子全集』第一卷(古典文庫)による。

(14) 『上田秋成全集』第十卷「藤篋冊子」異文の資料と考証(中村幸彦氏)二九五～二九八頁。なお同氏によると、『余斎文集』のはかに天理図書館蔵の秋成自筆の卷子本一卷に「花園」と題される一編があるという。こちらは栲亭の「愛花人詞」を引用し和歌一首を付したところまで終わっており、中村氏は「無腸」の署名からも寛政末年から享和初めの筆蹟と推察し、『余斎文集』に収録したものを改めたものと見ておられる。

(15) 注3論文において、中村博保氏は「花に戯れるのは蝶ばかりとは限らない。とすれば、このはなし、ユーモアのなかに毒のない風刺が隠さ

れていたことになる」と述べておられる。しかし本文を読む限りそうした言外の意図が隠されているとは考えにくく、ここは本文通り小鳥たちによって判断が下されたと解釈する。

(16) 新大系に指摘がある(四三一頁・注四〇)。

(17) 新大系に、「生得の性の不変は作者の持説(胆大小心録二。)(四三三頁・注三二)と注がある。

(18) 新大系に指摘がある(四三〇頁・注一三)一五)。

——まさもと・すいこ、本学大学院博士課程後期在学——